

教えて センセイ

井上主税先生に聞く〈飛鳥・藤原の宮都〉

政治・文化の 大きな変革期だった飛鳥時代 国際的視野に立った 古代国家が誕生しました



高松塚古墳壁画再現展示室内において（関西大学博物館）

井上主税さん (いのうえちから)

関西大学文学部教授、関西大学博物館長、韓国慶北大学校考古人類学科博士課程修了。奈良県立橿原考古学研究所主任研究員を経て、2026年8月現職。専門は考古学で、とくに古代日韓の交流関係を研究。

飛鳥・藤原の宮都―日本の国づくりはここから

今年（2026年）7月、「飛鳥・藤原の宮都」が世界文化遺産に登録され、大きな話題になっています。これは飛鳥時代に、現在の奈良県明日香村とその一帯に築かれた古代国家の遺跡群（飛鳥宮跡や藤原宮跡をはじめとする宮都、寺院、墳墓など19件の資産）が貴重な文化遺産であると評価されたのです。飛鳥時代とは592年から平城京に遷都する710年までの約120年間をいい、聖徳太子による「十七条の憲法制定」や「大化の改新（645年）」などは授業で学ばれたと思いますが、藤原という地域に宮都が築かれたことはあまり深掘りされなかったかもしれません。ではなぜ飛鳥時代にスポットが当てられたかというと、中国や朝鮮半島から新しい制度を取り入れ、日

かなり、それらの遺産がよく保存されていることも世界遺産として評価されたわけです。

さて、飛鳥時代の頃、日本が中央集権国家をめざした背景には要因があります。中国や朝鮮半島では大きな政治的変動が生じ、その頃「倭」と名乗っていた日本も新しい制度や思想を導入しなければ東アジアのなかで取り残されてしまう危惧があったのです。中国は王朝が2つある南北朝時代から、隋（581〜618年）が全国統一を成し遂げ、中央集権制に着手しますが大運河建設などの失政で滅亡。そのあと唐（618〜907年）が建国され、均田制（土地の公有化、租税の確保や租庸調（租税制度）といった制度を整え、周辺国に影響力を示しました。朝鮮半島では高句麗、百濟、新羅の三国が覇権争いをした結果、高句麗と百濟が滅亡。新羅が朝鮮半島を統一（676年）しました。

このような激変する東アジアの情勢に対応するため、日本も国際的視野に立った新しい国家体制の整備が急がれたのです。東アジアの情勢に詳しい人物が政治の中心におり、おそらくそれが蘇我氏だったのでしょう。蘇我氏は対外関係についていち早く情報をつかみ、仏教寺院の造営にも着手しました。当時東アジアではどの国も国家としての仏教が普及していたので、そのブームに乗り、思想を広めようとした。仏教伝来は538年（または552年）ですが、蘇我馬子は百濟から工人を呼び、最初の本格寺院である飛鳥寺（法興寺）を建立（606年完成）。7世紀になると日本でも仏教が広まり、国家的宗教色を帯びるようになりました。

地面の奥深くには飛鳥時代の世界が眠っている

古墳時代はいかに大きな古墳、とりわけ前方後円墳という特徴のある形のお墓を造ることに社会のエネルギーが注がれました。古墳は権威の象徴であり、形や規模で力を示したのです。やがて飛鳥時代になると巨大な前方後円墳の築造をやめ、有力者の墓は方墳や円墳になっていきます。中央集権国家の象徴である宮都の整備や寺院の建立に社会のエネルギーが向けられたのです。592年、推古天皇が飛鳥の地域に「豊浦宮」を造り、以降、4代にわたって飛鳥の地に宮殿が造られたことが飛鳥時代という名称の由来になりました（難波宮、大津宮を除く）。持統天皇のとき、飛鳥の狭い盆地を飛び出し、大和三山（香久山・畝傍山・耳成山）に囲まれた平野部に藤原宮を構え、宮殿

の周囲に基盤目状の道路で区画した本格的な京城が誕生しました（694〜710年）。平城京や平安京よりも大きかった「十条十坊（5.3km四方）説」が有力です。宮殿の屋根に瓦が葺かれたのも藤原宮が最初。建物に初めて瓦が用いられたのは飛鳥寺で、文献によると百濟の工人が瓦を焼いたと書かれており、出土した瓦の紋様は百濟の寺院で見つっている紋様とそっくりです。文献の内容と出土した考古資料が一致しています。『日本書紀』や『古事記』、『続日本紀』などの文献、とくに『日本書紀』は信憑性が問われていますが、飛鳥時代に関する記述については発掘の成果と一致するところが多いようです。

関西大学は、初代の考古学教授が奈良県立橿原考古学研究所を設立し、飛鳥地域の発掘を行って以来、長年飛鳥地域の研究を行ってきました。19件の資産に数えられる石舞台古墳や中尾山古墳をはじめ、高松塚古墳において は本学の教員、学生が発掘調査に参加し、壁画の発見に尽力しました（1972年）。この貴重な文化遺産を後世に伝えるため、発見直後の写真をもとに精密な美術陶板で石室を再現。当時の姿を関西大学博物館前に野外展示しています。中国や朝鮮半島にも壁画古墳はありますが、高松塚古墳と同じ絵は見つかっていません。絵のモチーフは似ていますが大きさが全く違うため、高松塚古墳の壁画は日本風にアレンジされたものと考えられます。

「飛鳥・藤原の宮都」の遺跡群を訪ねると、建物の外観は残っておらず、わずかな痕跡と素朴な田園風景しか見られません。これらの景色だけではピンときませんが、その地下にはまだまだ発掘できていない文化遺産がたくさん眠っています。「日本の原風景」「心のふるさと」と呼ばれる飛鳥・藤原の地は住民生活と折り合いながら、歴史的風土が守られてきました。国づくりのエネルギーに満ちた飛鳥・藤原の魅力を想像力豊かに味わっていただきたいですね。



写真右奥/日本初の本格都城「藤原宮跡」。柱列を復元
写真右/壁画で一躍有名になった高松塚古墳。本物の壁画は仮設修理施設で保管
(写真: photoAC)



写真左/飛鳥宮跡に見られる石敷広場と大井戸跡（復元）。写真上/蘇我馬子の墳墓説が有力の「石舞台古墳」。当時最大級の方墳。石材の総重量は約2300t。

